

絵画と書物

文学部はテキストだけでなくイメージも研究します

文学部というともっぱら文字で記された

テキストを研究するのだと思い込んではいないだろうか。

しかし本学部では絵画や彫刻あるいは遺跡や考古遺品といったものまでを研究対象としている。例えば通常は書かれた内容が問題となる書物にしても、それとは異なった学問的アプローチが可能なのだ。

書物は美術品でもあった。

といっても、昨今のお手軽な出版文化の中に身を置くわれわれにはなかなかピンとこないのであるが、とりあえず右頁をご覧ください。15世紀に北イタリアで制作された聖書写本の一葉である。

この絢爛豪華な装飾はいかがであろうか。ラテン語で書かれたテキストが右方の一面に見えるが、その他のスペースは所狭しと装飾で埋め尽くされている。テキストの左側、楽譜の記された巻紙を足に挟む裸体童子の描かれた縦長長方形の区画は、実は単なる装飾ではなく、『創世記』の最初の一文「初めに神は天地を創造された In principio…」の頭文字 I を表す。そしてその周囲を『創世記』冒頭の諸エピソードを描いた挿絵区画が取り囲んでいる。それぞれの区画は華麗な動植物モチーフや古代風の柱によって接続され、テキストの右側欄外にはこの書物の注文主の紋章も描かれている。

これがいわゆる彩飾写本というものである。そもそも西洋世界においては、1440年にグーテンベルクが活版印刷術を発明するまで、たいていの書物は写字生により筆写され挿絵画家により装飾が施されたのである。**古来、書物は単にテキストを供するためのみに存在したのではなかった。**教会において使用される書物は、当然のことながら神のための荘厳の場となる。一方世俗の権力者にとっては、書物を所有することに意味があった。書物は宝石や工芸品と同じく財産目録にも記すべき宝物であり、それを所有することは権力を誇示することにつながったのである。右頁の聖書写本を所有したフェッラーラ公爵は、ローマ旅行の際も同書を携え、あまつさえ教皇にそれを見せびらかした。**書物に描かれた挿絵装飾はテキストと密接な関係を有する。**挿絵がテキストに註釈を施すこともあれば、挿絵が画家の誤読を暴くケースもある。挿絵装飾にはそれぞれの時代の美術様式が刻印されているし、テキストの方もその時代の書体で筆写されている。

書物を美術品として眺めてみよう。書物に描かれた絵画に気をとめてみよう。そこから見えてくるものは少なくはないはずだ。

(京谷 啓徳、美学・美術史)

